

三田市

大 藪 遺 跡

—(主)三田後川上線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24(2012)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

三田市

大 軏 遺 跡

— (主)三田後川上線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 24(2012) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、三田市上槻瀬に所在する大蔵遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は(主)三田後川上線道路改良事業に先立つもので、兵庫県阪神県民局宝塚土木事務所三田業務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。発掘調査は、平成16年度に実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）山田清朝・鐵英記が担当した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社イビソクに委託して行った。
5. 整理作業は、平成21年度から兵庫県立考古博物館にて実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が株式会社タニグチフォト・株式会社地域文化財研究所に委託して行った。
7. 調査成果の測量は、電子基準点三田・猪名川の2点を基地点として、3級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。
　土坑→S K、溝→S D、柱穴→P
10. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
11. 本書の編集は杉村明美の補助を得て山田が行い、全て山田が執筆した。
12. 本報告にかかるる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
13. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

高島信之・山崎敏昭

目 次

第1章 大藪遺跡	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第2章 調査の経緯	
第1節 調査の起因	9
第2節 確認調査・本発掘調査・整理作業	10
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序と遺構の検出	11
第2節 遺構・遺物	13
第4章 まとめ	22
報告書抄録	23

挿図目次

第1図 三田市の位置.....	1	第10図 竣工後の調査地（北から）.....	9
第2図 高平谷（南から）.....	1	第11図 調査位置図.....	9
第3図 大藪遺跡全景（東上空から）.....	1	第12図 基本土層図.....	11
第4図 武庫川水系.....	2	第13図 平面図.....	12
第5図 三田市の地理的位置.....	3	第14図 S D01の検出.....	13
第6図 主要周辺遺跡.....	4	第15図 S D01断面.....	13
第7図 大藪遺跡（南東上空から）.....	5	第16図 出土土器(1).....	15
第8図 大藪古墳.....	6	第17図 出土土器(2).....	17
第9図 竣工後の調査地（南から）.....	9	第18図 出土鉄製品.....	19

表目次

第1表 主要周辺遺跡.....	5	第3表 出土土器一覧(2).....	20・21
第2表 出土土器一覧(1).....	18・19		

写真図版目次

写真図版1 遺構 全景 南から	写真図版6 遺物 出土土器 (15~23)
写真図版2 遺構 北半部 南から	写真図版7 遺物 出土土器 (24~30)
写真図版3 遺構 柱穴 土器出土状況　　柱穴 断面	写真図版8 遺物 出土土器 (31~38)
写真図版4 遺物 出土土器 (1~8)	写真図版9 遺物 出土土器 (39~46)
写真図版5 遺物 出土土器 (9~14)	写真図版10 遺物 出土土器 (47~53)
	写真図版11 遺物 出土土器 (54~58)
	写真図版12 遺物 出土鉄製品 (M1~M3)

第1章 大藪遺跡

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

大藪遺跡は三田市に所在する。大藪遺跡の所在する三田市は、兵庫県の東部内陆部に位置する(第1図)。南側を神戸市北区と、東側を宝塚市、北東部を猪名川町と、北側を篠山市と、南西側を三木市と、西側を加東市とそれぞれ接している(第5図)。市域の規模は、東西19.3km、南北17.8kmを測り、面積は210.22km²である。また人口は、約11万5千人(平成23年12月現在 三田市ホームページによる)である。



第1図 三田市の位置

2. 地形的環境

三田市は、その中心部は武庫川を中心とした三田盆地が形成されているが、南側は丘陵地、北側は山間地となっている。北側の山間地には、幾筋かの谷底平野が形成されている。大藪遺跡が位置するのは、このような谷底平野のひとつ、羽束川を中心に形成された谷底平野に位置する。三田市のなかでも東部に位置し、この谷底平野は通称「高平谷」と呼ばれている(第2図)。当谷底平野の東側は、宝塚市と猪名川町にあたる。

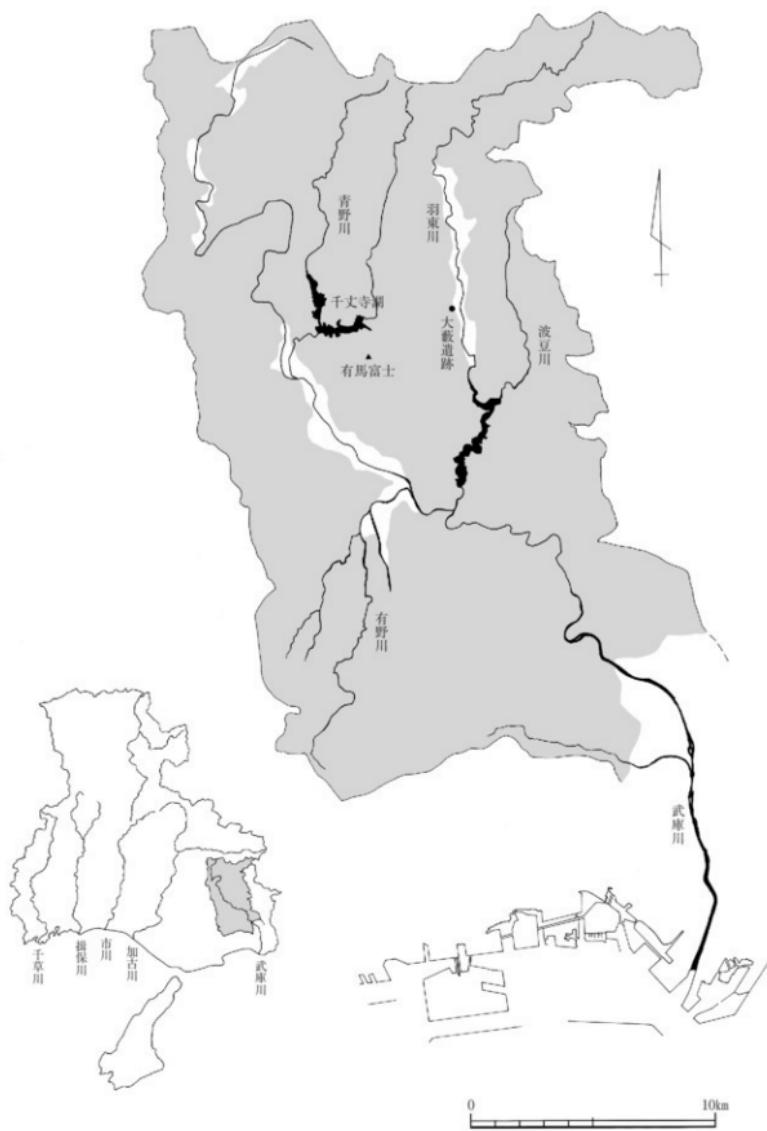
この高平谷の中心をなす羽束川は、武庫川流域を形成する小河川の一つで、大阪府能勢町北部を源とし、南方向に流下し、三田市波豆で波豆川と合流後、神戸市北区道場町で武庫川に合流している(第4図)。全長は約25kmである。この谷底平野に向って、小規模な谷が開け、この谷を中心に扇状地が形成されている。この一つの扇状地に、大藪遺跡が立地する(第3図)。



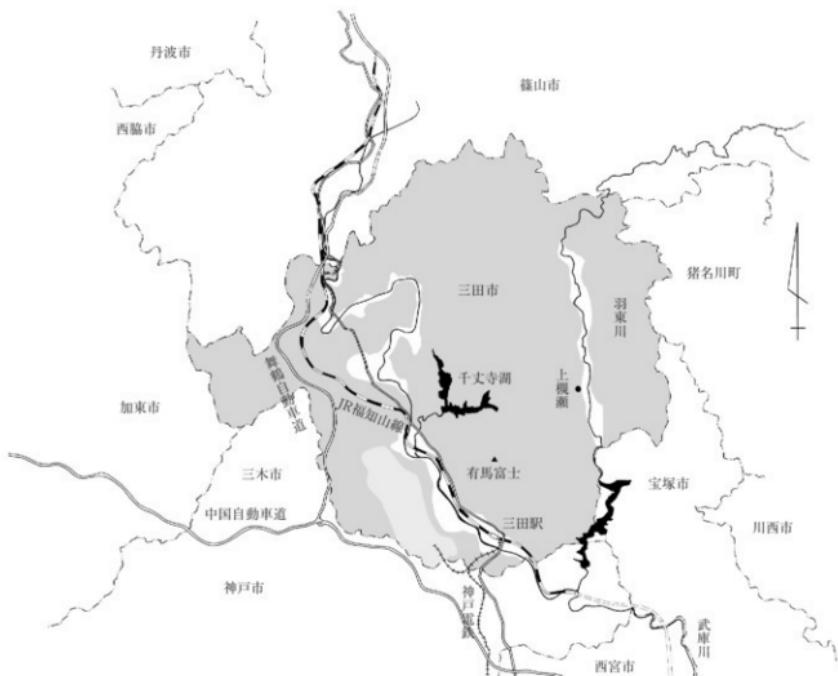
第2図 高平谷（南から）



第3図 大藪遺跡全景（東上空から）



第4図 武庫川水系

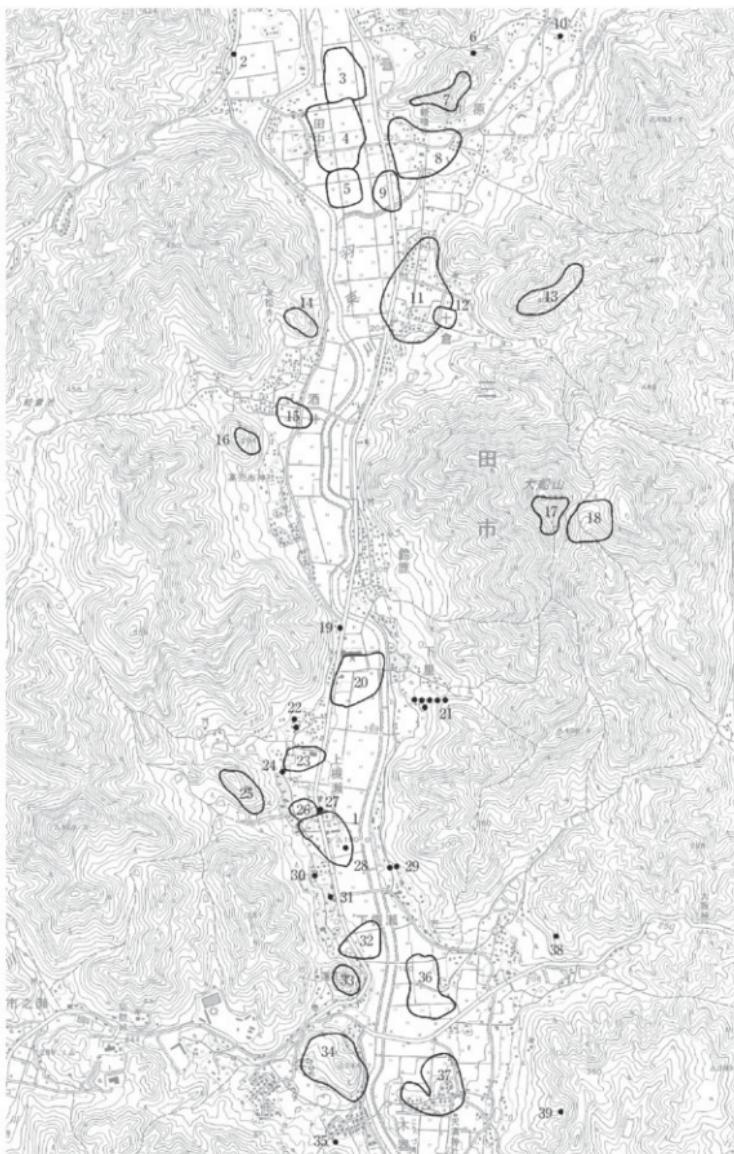


第5図 三田市の地理的位置

大蔵跡が立地する扇状地は、西側から東側に向って開けた扇状地で、調査地は本扇状地の南東部にあたる。このため、調査地は、北側から南側にかけて傾斜している。地表面の標高は、北端部で194.10m、南端部で192.80mである。

〔註〕

- (1) 三田市教育委員会『兵庫県三田市文化財調査報告第7冊』1990



第6図 主要周辺遺跡

第2節 歴史的環境

1. はじめに

大蔵遺跡の所在する高平谷一帯には多くの遺跡が周知されている(第6図・第1表)。これらの遺跡について、時代ごとにまとめていくことにしたい。特に、調査が行われた遺跡を中心にまとめていくことにする。

2. 主要周辺遺跡

当概地域には、(1)縄文時代、(2)弥生時代、(3)古墳時代、(4)奈良時代、(5)平安時代後半～中世、(6)近世、の遺構・遺物が明らかとなっている。

(1) 縄文時代

大蔵遺跡(1：第7図)、布木・堂ノ前遺跡(3)、十倉遺跡(11)、酒井・門田遺跡(15)が周知されている。

大蔵遺跡では県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代早期末・中期末・後期の土器が出土している。三田市域で唯一縄文時代数期に渡り継続した遺跡で、中核的な集落と位置付けられている⁽¹⁾。

布木・堂ノ前遺跡は、県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われている。晩期の深鉢を伴う土坑が検出されている。滋賀里Ⅲb式に位置付けられている⁽²⁾。

酒井・門田遺跡においても、県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われている。福田KⅡ式の深鉢・砥石・磨石・サヌカイト剝片が出土している⁽³⁾。



第7図 大蔵遺跡（南東上空から）

第1表 主要周辺遺跡

No.	遺跡名	県道跡番号	No.	遺跡名	県道跡番号
1	大蔵遺跡	200654	21	北ノ脇古墳群	200604～200609
2	慈能寺址	200864	22	エン谷古墳群	200587～200588
3	布木・堂ノ前遺跡	200641	23	上機瀬・池尻遺跡	200653
4	川原・寺瀬遺跡	200642	24	大仙寺址	200859
5	高平・田中城跡	200645	25	上機瀬背	200912
6	岩井廐寺	200860	26	上機瀬・薬師堂遺跡	200914
7	川原跡	200909	27	福田古墳	200586
8	川原・地田遺跡	200643	28	大蔵古墳	200610
9	川原・灰原遺跡	200644	29	浅倉古墳群	200613～200614
10	川原・早苗遺跡	200646	30	出雲古墳	200611
11	十倉遺跡	200647	31	井上古墳	200612
12	十倉城居館跡	200649	32	下機瀬・新井遺跡	200655
13	十倉城跡	200650	33	蓮花寺中世墓	200915
14	酒井北寺	200910	34	木器城跡	200657
15	酒井・門田遺跡	200648	35	木器1号窯	200615
16	酒井寺	200911	36	下機瀬・灰づ道跡	200656
17	大船山山頂遺跡	200651	37	木器・宮北遺跡	200658
18	大舟寺跡	200913	38	木器3号窯	200618
19	塚本古墳	200602	39	木器2号窯	200616
20	下里・大田口遺跡	200652			

(2) 弥生時代

川原・早苗遺跡(10)・十倉遺跡(11)が周知されている。

川原・早苗遺跡では、県営は場整備事業に伴い確認調査が行われ、流路内から弥生時代前期の土器片が出土している。前期段階から、谷奥まで弥生文化が波及していたことを示す資料として注目されている⁽⁴⁾。

十倉遺跡では、県営は場整備事業と県道拡幅事業に伴い発掘調査が行われ、いずれの調査においても弥生時代後期の堅穴住居が検出されている⁽⁵⁾。

(3) 古墳時代

川原・早苗遺跡(10)・十倉遺跡(11)、塚本古墳(19)、下里・大田口遺跡(20)、北ノ脇古墳群(21)、エン谷古墳群(22)、福田古墳(27)、大藪古墳(28)、浅倉古墳群(29)、出雲古墳(30)、井上古墳(31)が周知されている。

十倉遺跡では、県営は場整備に伴う調査で、古墳時代前期の堅穴住居跡が検出されている⁽⁵⁾。

下里・大田口遺跡では、県営は場整備に伴う調査で、溝状造構が検出されている。溝状造構内からは、須恵器蓋杯・壺・壺蓋・台付椀・甕が出土している。これらの須恵器から、6世紀末から7世紀初めと考えられている⁽⁶⁾。

塚本古墳は、径9.8mの横穴式石室を主体とする円墳である。県営は場整備に伴い、墳丘周囲を中心確認調査が行われている。埋葬施設は横穴式石室と考えられ、墳丘周囲から出土した須恵亮片から6世紀後葉～末葉と考えられている⁽⁷⁾。

北ノ脇古墳群は6基からなる古墳群（北ノ脇1号墳～北ノ脇6号墳）で、いずれも横穴式石室を主体とする円墳である。径は6.5m～13.5mである。高平地区で唯一群をなす古墳群で、石室の特徴から6世紀後半から7世紀初めにかけて順次築造されていったとも考えられている⁽⁸⁾。

エン谷古墳群は2基（エン谷1号墳・エン谷2号墳）からなる古墳群で、横穴式石室を主体とする円墳である。径は、1号墳が8m、2号墳が6.5mである。

福田古墳は径11mの円墳で、調査により横穴式石室が明らかとなっている。県営は場整備事業に伴い、三田市教育委員会により範囲確認調査が行われている。調査の結果、横穴式石室内から須恵器の提瓶および短頸壺が出土している。これらの土器から6

世紀末頃と考えられている⁽⁹⁾。

大藪古墳は調査地の東側に近接して遺存する（第8図）、径13mの横穴式石室を主体とする円墳である。現在も、石室を露出した形で保存されている。範囲確認調査が行われ、周溝と考えられる溝状造構が検出されている。遺物は出土していないが、石室の特徴から、6世紀末葉頃と考えられている⁽¹⁰⁾。

この他、浅倉古墳群は2基（浅倉1号墳・浅倉2号墳）からなる径9m大的円墳で、横穴式石室を主体とする。出雲古墳は径10mの横穴式石室を主体とする古墳である。井上古墳については、主体部等の詳細は明らかとなっていない。



第8図 大藪古墳

(4) 奈良時代

木器窯跡群(35・38・39)が周知されている。木器窯跡群は3基(木器1号窯～木器3号窯)からなるが、いずれも8世紀末の須恵器焼成窯である⁽¹¹⁾。

(5) 平安時代後半～中世

布本・堂ノ前遺跡(3)・川原・寺淵遺跡(4)・高平・田中城跡(5)・川原砦(7)・川原・地田遺跡(8)・川原・灰原遺跡(9)・川原・早苗遺跡(10)・十倉遺跡(11)・十倉城居館跡(12)・十倉城跡(13)・酒井・門田遺跡(15)・大船山山頂遺跡(17)・下里・大田口遺跡(20)・上櫻瀬・池尻遺跡(23)・下櫻瀬・新井遺跡(32)・蓮花寺中世墓(33)、木器城跡(34)、下櫻瀬・灰ブ遺跡(36)、木器・宮北遺跡(37)が周知されている。

川原・寺淵遺跡は、調査により掘立柱建物跡が明らかとなっている。高平・田中城跡は城館遺跡で、調査により井戸・溝・堀が明らかとなっている。川原砦は、中世から近世にかけての城跡で、曲輪と堀切が残存している。川原・地田遺跡は、調査により掘立柱建物跡と土坑が明らかくなっている。川原・灰原遺跡は、平安時代から中世にかけての集落跡で、調査により掘立柱建物跡と柵列が明らかくなっている。

十倉城居館跡は、中世から近世にかけての城跡で、郭・土塁・堀切が残存している。十倉城跡も中世から近世にかけての城館遺跡で、郭・土塁・縦堀・堀切が残存している。酒井・門田遺跡は、平安時代から中世にかけての集落跡で、掘立柱建物跡が調査で明らかくなっている。大船山山頂遺跡は平安時代から中世にかけての寺院跡で、須恵器の散布が認められる。

上櫻瀬・池尻遺跡は、平安時代から中世にかけての集落跡で、掘立柱建物跡と溝が検出されている。下櫻瀬・新井遺跡は平安時代から中世にかけての集落跡で、掘立柱建物跡が調査により明らかくなっている。木器城跡は城跡で、郭・土塁・堀切が調査によって明らかくなっている。下櫻瀬・灰ブ遺跡は平安時代から中世にかけての集落跡で、調査で掘立柱建物跡と溝が明らかくなっている。

木器・宮北遺跡は平安時代から中世にかけての集落跡で、調査で掘立柱建物跡・溝・土坑が明らかくなっている。

(5) 近世

慈徳寺址(2)・岩井廃寺(6)・大仙寺址(24)が周知されている。大仙寺址は寺跡で、調査により礎石建物と祭壇址が明らかくなっている。

〔註〕

- (1) 和田秀寿「大歳遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (2) 和田秀寿「布木・堂ノ前遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (3) 和田秀寿「酒井・門田遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (4) 岸本一宏「川原・早苗遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (5) 岸本一宏「十倉遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (6) 山崎敏昭「大田口遺跡」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (7) 川口修実「塚ノ本古墳」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (8) 山崎敏昭「北ノ脇古墳群」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (9) 川口修実「福田古墳」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (10) 川口修実「大歳古墳」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010
- (11) 津川千恵「木器窯跡群」『三田市史 第八巻 考古編』三田市 2010

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

1. はじめに

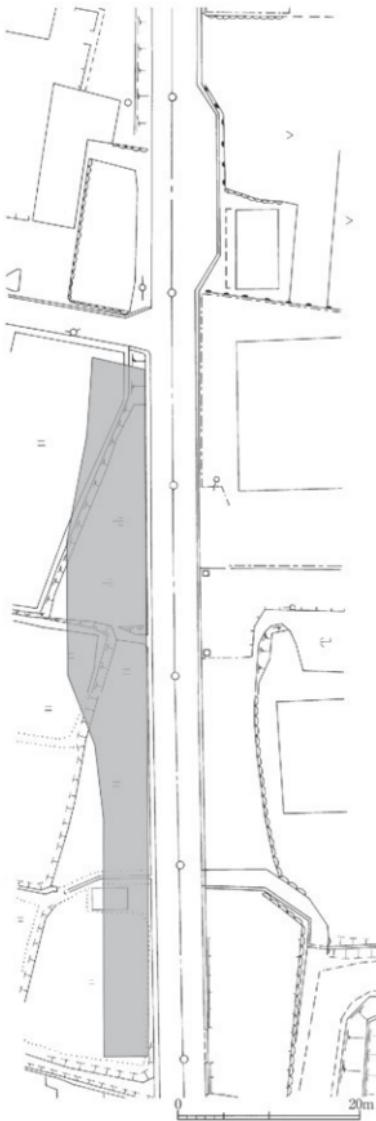
調査は、(主)三田市後川上線道路改良事業に起因するものである。具体的には、既存の県道を西側へ拡幅する計画である(第11図)。調査は、この拡幅箇所を対象とした。当地は、以前から大藪遺跡として周知されていたが、確認調査の結果を受け、本発掘調査を実施することになったものである。調査面積は433m²である。



第9図 竣工後の調査地（南から）



第10図 竣工後の調査地（北から）



第11図 調査位置図

第2節 確認調査・本発掘調査・整理作業

1. はじめに

大蔵遺跡は以前から周知されていた遺跡である。このため、工事計画に際し、確認調査を実施し、その結果、本発掘調査を行うこととなったものである。

2. 確認調査

確認調査は、平成15年度に行なわれた。確認調査は、(主)三田後川上線道路改良事業予定地のなかで、上櫻瀬地内を対象とした。その概要等は以下のとおりである。

遺跡調査番号 2003151

調査期間 平成16年2月18日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 渡辺 昇

調査面積 12m²

調査概要 調査は、1m × 6mを基準としたトレチングを6箇所に設定し、埋蔵文化財の有無の確認をおこなった。この結果、遺物包含層を確認するとともに、柱穴等の遺構を確認した。このため、上櫻瀬地内の事業予定地内には埋蔵文化財の包蔵が明らかとなるとともに、当地で本発掘調査が実施されることとなった。

3. 本発掘調査

本発掘調査は、平成16年度に行なわれた。その概要等は以下の通りである。

遺跡調査番号 2004152

調査期間 平成16年5月18日～6月30日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・鐵 英記

調査面積 433m²

4. 整理作業

整理作業は、平成21年度～23年度の3箇年にわたり行われた。各年度の整理内容・体制等は以下のとおりである。

平成21年度 整理保存班 岡田章一・菱田淳子・岡本一秀

調査班 山田清朝

嘱託員 大前篤子・藤井光代・長濱重美・前田恵梨子

平成22年度 整理保存課 岡田章一・山本 誠

調査課 山田清朝

嘱託員 岡田美徳

平成23年度 整理保存課 山本 誠・深江英憲

調査課 山田清朝

嘱託員 杉村明美

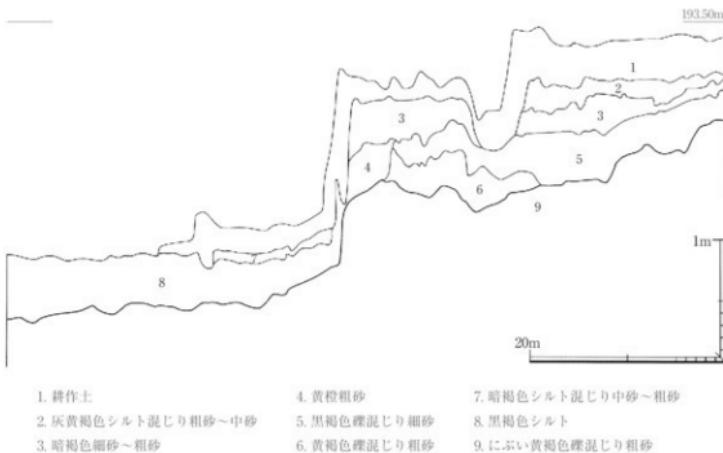
第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構の検出

1. 基本層序

上から、耕作土・土壤層・基盤層の堆積が認められた(第12図)。土壤層は、2層～8層が該当し、2層は鎌倉時代の包含層となっている。中礫を含む粗砂からなり、土石流により堆積したものと考えられる。5層についても、礫を含む粗砂・細砂からなり古墳時代から奈良時代にかけての包含層となっている。基盤層は、礫混じりの粗砂からなり、土石流堆積に起因する層である。

先述したように、調査地は、地形的に北側から南側へ傾斜している。一方、当地は調査前まで畠地として利用してきた。このため、基盤層まで削平→盛土がなされている。このため、多くの層は階段状を呈している。



第12図 基本土層図

2. 遺構の検出

調査は、基盤層上面（5・6・8層下面）の1面で遺構を検出している。



第13図 平面図

第2節 遺構・遺物

1. 検出遺構

柱穴・土坑・溝を検出している。

(1)柱穴

約46穴検出されている。これらの柱穴は、調査区北端部・中央部・南半部に集中して検出されている。しかし、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。全ての柱穴について時期を特定することはできなかったが、いくつかの柱穴については、中世の土器が出土している。特に、P48内からは土師器碗が1個体(10)、P39内からは土器器の壺が2個体(17・18)が出土している(写真図版2)。

(2)土坑

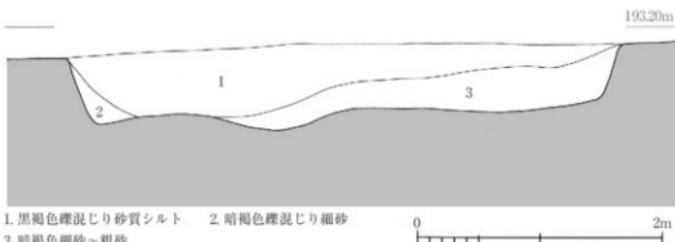
4基検出されている。しかし、いずれの土坑からも土器が出土せず、時期を特定することは困難である。

(3)溝

S D01の1条を検出している。調査区北端部で検出した遺構で、ほぼ東西方向に掘削されている。他の遺構との切り合い関係は認められない。検出した長さは6.50mで、両端とも調査区外へのびている。検出面における幅は4.50mを測り、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは70cmで、底部は比較的平坦である。埋土は3層からなり(第15図)、いずれも土石流により堆積している。埋土内からは弥生土器の壺(1・2)が出土している。



第14図 SD01の検出



第15図 SD01断面

2. 出土遺物

出土遺物は、土器と鉄製品が出土している。土器が大半で、鉄製品は鉄釘が数点出土しているのみである。

(1) 土器

団化できたのは58点である。このなかで遺構に伴うものは5点で、大半は5層(第12図)からの出土である。遺構に伴う土器は、SD01出土の1と2、P48出土の10、P39出土の17と18である。種別としては、弥生土器・古墳時代土師器・古墳時代須恵器・奈良時代須恵器・中世土器が出土している。

① 弥生土器

弥生土器は、1~8の8点が出土している。いずれも後期に位置付けられるものである。器種としては、壺と甌が出土している。甌は1点(8)団化したが、底部片に限られる。明確な平底形態をなしている。

甌は、4個体(1~4)団化したが、いずれもV様式系の甌である。外面は叩き整形により仕上げられているが、体部内面がナデ調整により仕上げられるタイプ(1・2)と、ヘラ削りにより仕上げられるタイプ(3・4)に分類できる。

このほか、5と6については、底部のみの残存であるが、鉢の可能性が考えられる。

② 古墳時代土師器

鉢・椀・皿・甌の各器種が出土している。

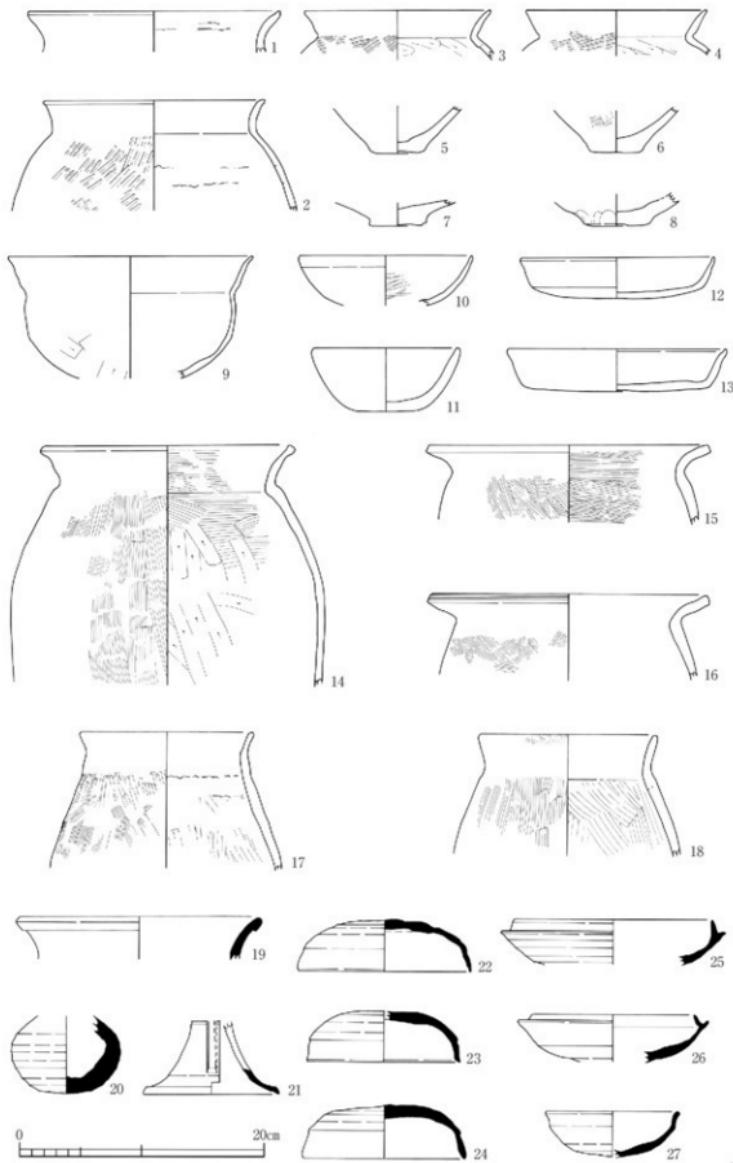
鉢は、9の1個体に限られる。口縁部から底部付近まで残存する個体で、全体的に器壁が薄く仕上げられている。体部内面と体部外面上半がナデ調整、体部外面下半がヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。

椀は、10と11の2個体が出土している。10は、体部内面がヘラミガキ、体部外表面がヘラナデにより仕上げられた後、口縁部がヨコナデにより仕上げられている。11は、10に対して深いタイプで、器壁も全体的に厚く仕上げられている。底部から口縁部にかけて指オサエとナデ調整により仕上げられている。

皿は、12と13の2個体が出土している。基本的に同タイプに分類できるもので、口縁端部をつまみ、内面が凹線状をなしている。また、両側とも化粧土が塗布されている。12は、底部がヘラ削り後ヘラミガキにより仕上げられ、最後に体部から口縁部にかけての内外面が回転ナデ調整により仕上げられている。底部内面は、ナデ調整により仕上げられている。13も、底部はヘラ削りにより仕上げられ、体部から口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。底部内面もナデ調整により仕上げられている。

甌は、14~18の5個体出土している。口縁部がく字形をなすタイプと直口タイプの2タイプが出土している。

前者は、14~16の3個体である。14は、長胴タイプに分類されるもので、体部中位まで残存する。体部外表面はハケ調整、内面はハケ調整後ヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内面をハケ調整後内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。15は、体部内外面をハケ調整後、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。16は、体部外表面がハケ調整、内面が指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内面をハケ調整後、内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。



第16図 出土土器(1)

後者は、17と18の2個体である。17は、立ち上がりが急で直線的な肩部に対して、口縁部がわずかに斜上方に立ち上がる。体部内面をヘラナデ、外面をヘラミガキで仕上げ、最後に口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。口頭部外面に煤の付着が認められる。18は、17に対して肩部がやや内湾傾向にある。体部から口縁部にかけて内外面ともハケ調整により仕上げられ、最後に口縁部外面が横ナデ調整により仕上げられている。

③古墳時代須恵器

壺・はそう・高杯・杯蓋・杯H・杯Gの各器種が出土している。

壺は19の1点が出土している。口縁部のみの残存で、端部は断面長方形状に肥厚している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

はそうも20の1点が出土している。体部のみの残存で、穿孔部分は残存しない。体部外面下半が回転ヘラ削りにより仕上げられている以外は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

高杯も21の1点が出土している。脚部のみの残存で、長方形透かしが1段残存する。3方に開けられていたものと考えられる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

杯蓋は22~24の3個体出土している。22は、杯日の蓋に分類されるもので、天井部の1/3がヘラ削りにより仕上げられている。23は、口縁端部が内傾する端面を有し、天井部の1/2がヘラ削りにより仕上げられている。MT15型式に位置付けられる。24は、形態的には22とは同じである。ただし、天井部のヘラ削りが全体の2/3に及んでいる。

杯Hは25と26の2個体が出土している。2個体は基本的には同タイプに分類されるものであるが、法量的に差が認められる。25は、底部ほぼ全体が回転ヘラ削りにより仕上げられている。26の底部は、全体の2/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Gは27と28の2個体が出土している。27については、口縁部の形態から杯Gとしたが、杯H蓋の可能性も考えられる。底部の1/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。28は、典型的な杯Gで、底部全体が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

④奈良時代須恵器

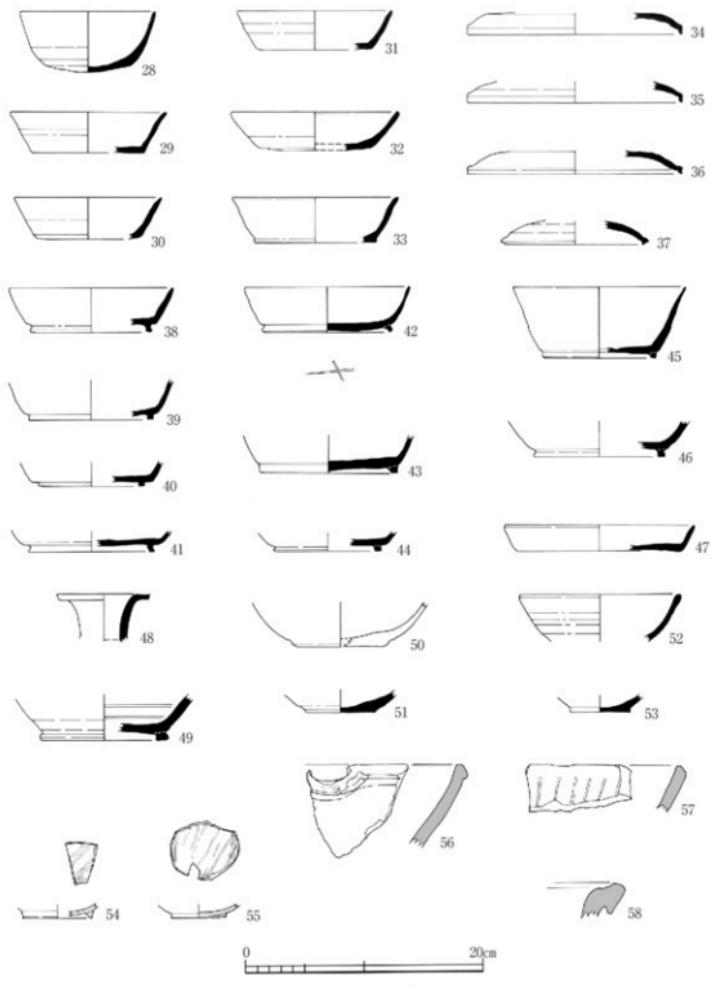
杯A・杯B蓋・杯B・皿・壺の各器種が出土している。

杯Aは、29~33の5個体が出土している。33をのぞいては、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。また、29と31は、底部と体部の境が明確に屈曲している。33の底部は、静止ヘラ切りにより切り離されている。

杯B蓋は、34~37の4個体出土している。4個体ともつまみまで残存しない。37を除いては同様の形態的特徴が認められるが、37については小型で、杯B以外の蓋の可能性も考えられる。

杯Bは、38~46の9個体出土している。38~41については、高台が体部との変換部より内側に貼り付けられている。42の底部にはヘラ記号が認められる。45については、口径に対して器高が高く、椀に分類される可能性も考えられる。

皿は47の1個体が出土している。口縁部は底部に対して明確に屈曲し、立ち上がる。底部はナデ調整により仕上げられている。壺は、48と49の2個体が出土している。48は、壺Lの口頭部である。口縁部内面に灰被りが認められる。49は、壺Aの底部である。内面に釉の付着が認められる。



第17図 出土土器(2)

⑤中世土器

土師器、須恵器、瓦器、丹波焼が出土している。

土師器は、7と50の楕2個体が出土している。底部は回転糸切りにより切り離され、わずかに平高台の痕跡をとどめる。内面見込みは落ち込まない。

須恵器は、51～53の3個体が出土している。いずれも椀である。51は平底をなし、回転糸切り後静止ヘラ切りにより切り離されている。52は、口縁部から体部にかけて残存し、内湾気味に立ち上がっていいる。53は底部を中心に残存する。平高台をなし、回転糸切りにより切り離されている。

瓦器は、54と55の2個体が出土している。いずれも椀に分類されるもので、底部を中心に残存する。54は、底部に断面三角形の高台が貼り付けられ、内面には圓線状の暗文が認められる。炭素の吸着が不十分である。55は、高台3.5mmと、54より小規模な断面三角形の突帯が貼り付けられている。内面には平行する暗文が認められる。

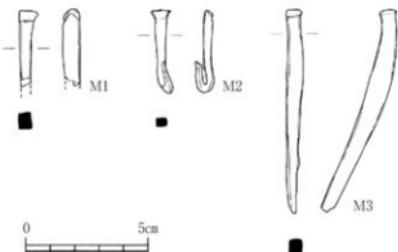
丹波焼は、56～58の3個体が出土している。56は捏鉢で、片口部分を中心に口縁部がわずかに残存する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。57は、擂鉢の一部で、口縁部を中心に残存する。内面には1本書きの御し目が認められる。58は、甕の口縁部の小片である。断面N字形をなし、14世紀～15世紀に位置付けられる。

第2表 出土土器一覧(1)

No	種別	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況
1	弥生	甕	S D 1	20.40		3.40	口縁部 1/5
2	弥生	甕	S D 1	17.70		10.10	口縁部 1/4
3	弥生	甕		15.00		4.10	口縁部 1/4
4	弥生	甕		14.70		3.75	口縁部 1/3
5	弥生	鉢			4.40	3.90	底部 3/4
6	弥生	鉢			4.30	3.50	底部完存
7	弥生	壺			4.60	1.90	底部完存
8	弥生	壺			5.40	2.60	底部 1/2 強
9	土師器	鉢		19.80		10.00	口縁部 1/12
10	土師器	椀	P 48	14.00		4.10	口縁部 1/12
11	土師器	椀	S D 1 上面	11.80	5.25	5.20	口縁部 1/4
12	土師器	皿		15.70	14.05	3.40	口縁部～底部 2/3 強
13	土師器	皿		17.80	15.40	3.50	口縁部 1/4～底部完存
14	土師器	甕	S D 1 上面	20.10		10.85	口縁部 1/5
15	土師器	甕	S D 1 上面	22.80		6.30	口縁部 1/4 弱
16	土師器	甕		22.40		7.10	口縁部 1/2 弱
17	土師器	甕	P 39	13.70		11.20	口縁部 1/2
18	土師器	甕	P 39	14.30		10.00	口縁部 4/7
19	須恵器	壺		19.50		3.50	口縁部 1/12
20	須恵器	甕				6.40	体部 1/4
21	須恵器	高杯			11.20	6.10	脚部 1/3
22	須恵器	杯H蓋		13.95		4.30	完存
23	須恵器	杯H蓋		12.40		4.15	口縁部 1/4
24	須恵器	杯H蓋		13.20		4.40	口縁部 2/5
25	須恵器	杯H		16.20		3.70	口縁部 1/9

(2) 鉄製品

鉄釘が3点(M1～M3)出土している。いずれも断面方形をなす和釘である。M1は、頭部を表心に3.1cm残存する。頭部は頭巻タイプで、断面の規模は7mm×5mmである。M2は、ほぼ完存するが先端部を中心にして釣針状に折れ曲がっている。折れ曲がり部分を復元した全長は4.9mmと小型の釘である。断面の規模は3.8mm×5mmである。M3もほぼ完存し、残存長は8.7cmを測る。断面は7mm×5.8mmである。



第18図 出土鉄製品

焼成	色調	胎土	備考	揮区	写真
不良	にぶい黄橙	5mm以下の砂粒多く含む		16	4
良好	橙	3.5mm以下のチャート多く含む		16	4
良好	にぶい黄橙～橙	2mm以下の長石わずかに含む		16	4
良好	にぶい橙～橙	2mm以下のチャートわずかに含む		16	4
不良	浅黄橙	2mm以下のチャート多く含む		16	4
やや不良	浅黄	2mm以下のチャート多く含む		16	4
やや不良	浅黄橙～にぶい黄橙	1.5mm以下の砂粒多く含む		16	4
やや不良	橙～にぶい橙	2mm以下のチャート多く含む		16	4
やや不良	にぶい黄橙～橙	2.5mm以下のチャートわずかに含む		16	5
普通	灰黄～黒褐	2.5mm以下のチャート多く含む		16	5
不良	浅黄橙	1mm以下のチャート多く含む		16	5
不良	浅黄橙	0.1～2mm大の長石・チャート・カサリレキ含む		16	5
良好	浅黄橙	2mm以下のカサリレキ多く含む		16	5
	浅黄橙～にぶい黄橙	2mm以下の砂粒多く含む		16	5
良好	浅黄橙～にぶい黄橙	2mm以下のチャートわずかに含む		16	6
不良	浅黄橙	0.1～3mm大の長石・石英・チャート含む		16	6
良好	灰黄褐～浅黄橙	2mm以下のチャートわずかに含む		16	6
やや良	浅黄橙	2mm以下のチャートわずかに含む		16	6
普通	灰白～黄灰	0.5mm以下のチャート含む		16	6
普通	灰	2mm以下の長石わずかに含む		16	6
普通	灰～灰白	2mm以下のチャートわずかに含む		16	6
普通	灰	0.1～3mm大の長石・チャート含む		16	6
やや不良	灰	1.5mm以下の長石わずかに含む		16	6
普通	灰～灰白	1.5mm以下の長石わずかに含む		16	7
普通	灰～灰白	2mm以下のチャート含む		16	7

第3表 出土土器一覧(2)

No	種別	器種	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存状況
26	須恵器	杯H	S D I 上面	13.30		3.90	口縁部 1/6
27	須恵器	杯G or H 盖		10.80		3.75	口縁部 1/6
28	須恵器	杯G		11.40		5.20	口縁部 1/4
29	須恵器	杯A		12.90	9.50	3.50	口縁部～底部 1/4
30	須恵器	杯A		12.40	9.20	3.50	口縁部～体部 1/3
31	須恵器	杯A		12.90	9.70	3.30	口縁部 1/6
32	須恵器	杯A		14.00	9.30	3.20	口縁部 1/4
33	須恵器	杯A	S D I 上面	14.00	10.30	3.80	口縁部 1/12
34	須恵器	杯B 盖		17.80		1.80	口縁部 1/7
35	須恵器	杯B 盖		17.90		1.80	口縁部 1/9
36	須恵器	杯B 盖		17.90		1.90	口縁部 1/12
37	須恵器	杯B 盖？		11.50		2.00	口縁部 1/6
38	須恵器	杯B		13.80	10.30	3.75	口縁部 1/5
39	須恵器	杯B			10.40	3.40	底部 1/4
40	須恵器	杯B			9.10	2.10	底部 1/7
41	須恵器	杯B			10.50	1.80	底部 4/9
42	須恵器	杯B		13.90	10.90	3.85	口縁部 1/9・底部 3/4
43	須恵器	杯B			11.50	3.30	底部 1/3
44	須恵器	杯B	S D I 上面		9.10	1.60	底部 1/5
45	須恵器	杯B		14.40	9.30	6.00	底部 1/2弱
46	須恵器	杯B			11.00	3.00	底部 1/6
47	須恵器	皿		15.90	13.60	1.70	口縁部 1/6
48	須恵器	壺		4.10		7.80	口縁部 1/9
49	須恵器	壺			10.80	3.90	底部～体部 1/4
50	土師器	椀			8.00	3.80	底部～体部 1/4
51	須恵器	椀			5.90	1.90	底部 1/2弱
52	須恵器	椀		13.40		4.00	口縁部 1/6
53	須恵器	椀			5.10	1.50	底部 1/5
54	瓦器	椀			5.90	1.25	底部 1/6
55	瓦器	椀			4.50	1.20	底部完存
56	丹波焼	程鉢				7.10	口縁部わずか
57	丹波焼	程鉢				4.00	口縁部わずか
58	丹波焼	甕				2.30	口縁部わずか

焼成	色調	胎土	備考	挿図	写真
普通	灰	1.5mm以下のチャートわずかに含む		16	7
良好	灰～灰白	1mm以下の長石わずかに含む		17	7
不良	灰白～灰黄	1.5mm以下の長石わずかに含む		17	7
良好	灰～灰白	2mm以下のチャートわずかに含む	底部回転ヘラ切り	17	7
やや不良	灰白～黄灰	2.5mm以下のチャートわずかに含む	回転ヘラ切り	17	7
普通	灰～灰白	0.5mm以下の長石・チャート含む	ヘラ切り	17	8
やや不良	灰白～黄灰	1mm以下の長石わずかに含む	底部回転ヘラ切り	17	8
不良	灰白	2mm以下の長石多く含む	ヘラ切り	17	8
普通	灰白	1mm以下のチャート含む		17	8
良好	灰～灰白	1.5mm以下の長石わずかに含む		17	8
良好	灰白	0.5mm以下のチャートわずかに含む		17	8
良好	灰白	1.5mm以下のチャートわずかに含む		17	8
不良	灰白	1.5mm以下の砂粒わずかに含む	高台高8mm	17	8
良好	灰	0.5mm以下の砂粒多く含む	高台高4.5mm	17	9
良好	灰～灰白	2mm以下の砂粒多く含む	高台高3mm	17	9
良好	灰～灰白	1.5mm以下の長石わずかに含む	高台高5.5mm	17	9
普通	灰～灰白	3mm以下の長石含む	高台高6mm 底部にヘラ記号	17	9
普通	灰～灰白	1.5mm以下のチャートわずかに含む	高台高7mm	17	9
やや不良	灰～灰白	0.5mm以下のチャートわずかに含む	高台高5mm	17	9
普通	灰	0.1～3mm大の長石含む	高台高6mm 底部回転ヘラ切り	17	9
良好	灰～灰白	2mm以下の長石わずかに含む	高台高6.5mm	17	9
不良	灰白	2mm以下のチャートわずかに含む		17	10
普通	灰～灰白	1mm以下の長石わずかに含む		17	10
普通	灰	1.5mm以下のチャート含む	高台高7mm	17	10
良好	にぶい黄橙	0.5mm以下のチャートわずかに含む	底部回転糸切り	17	10
良好	灰	1.5mm以下の長石わずかに含む	底部糸切り	17	10
不良	にぶい黄橙～灰黄	1.5mm以下のチャート多く含む		17	10
やや良好	灰～灰白	1mm以下のチャートわずかに含む	底部回転糸切り	17	10
不良	灰白	2mm以下のチャートわずかに含む	高台高6mm	17	11
普通	灰	1mm以下の長石わずかに含む	高台高35mm	17	11
良好	橙～褐灰	2mm以下の長石わずかに含む		17	11
やや良好	灰	2mm以下の長石わずかに含む		17	11
不良	灰褐	2.5mm以下の長石わずかに含む		17	11

第4章　まとめ

最後に、本書で報告した調査成果について箇条書きにし、本報告のまとめとしたい。

1. 大藪遺跡は、羽束川を中心に形成された谷底平野を望む小扇状地上に立地する遺跡である。遺跡は、扇状地のなかでも南側の縁辺部付近にあたる。
2. 柱穴・土坑・溝を検出したが、時期を特定できる遺構はわずかである。
3. 土器は、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代・中世に各時期の土器が出土している。多くは遺構に伴うものではなく、土石流堆積層中から出土したものである。
古墳時代の遺物に関しては、本遺跡に近接する大藪古墳との関連が考えられる。また、中世の遺物に関しては、当地が川辺郡多田庄櫻瀬郷と称されていたことから、当概莊園に関連するものと考えられる。
4. 以上の状況から、今回報告する調査地は、遺跡の南側縁辺部にあたるものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	おおやぶいせき							
書名	大藪遺跡							
副書名								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第424冊							
編著者名	山田清朝							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	加古郡播磨町大中1丁目1番-1号							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 Tel078-362-3784							
発行年月日	2012年(平成24年)3月29日							
所収遺跡名 (県道跡番号)	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (nf)	調査原因
大藪遺跡 (2004152)	三田市上概瀬	28219	200654	34°56' 30"	134°16' 11"	平成16年 5月18日～ 6月30日	433	(主)三田市 後川上線道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大藪遺跡	中世	弥生時代後期		土器				
		古墳時代後期		土師器・須恵器				
		奈良時代		土師器・須恵器				
		中世	柱穴	土師器・須恵器・丹波焼・瓦器				
概要	大藪遺跡は、羽束川を中心に形成された谷底平野を望む小扇状地上に立地する遺跡である。遺跡は、扇状地のなかでも南側の縁辺部付近にあたる。 柱穴・土坑・溝を検出したが、時期を特定できる遺構はわずかである。 土器は、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代・中世に各時期の土器が出土している。多くは遺構に伴うものではなく、土石流堆積層中から出土したものである。 以上の状況から、今回報告する調査地は、遺跡の南側縁辺部にあたるものと考えられる。							

写 真 図 版

写真図版1 遺構



全景 南から

写真図版2 遺構



北半部 南から



(左) 柱穴
土器出土状況

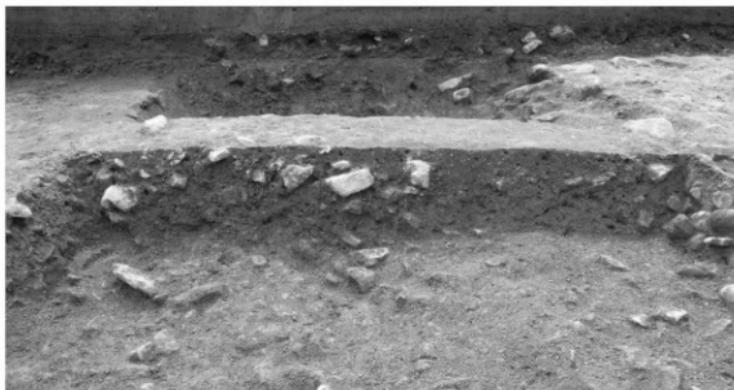


(右) 柱穴 断面

写真図版3 遺構



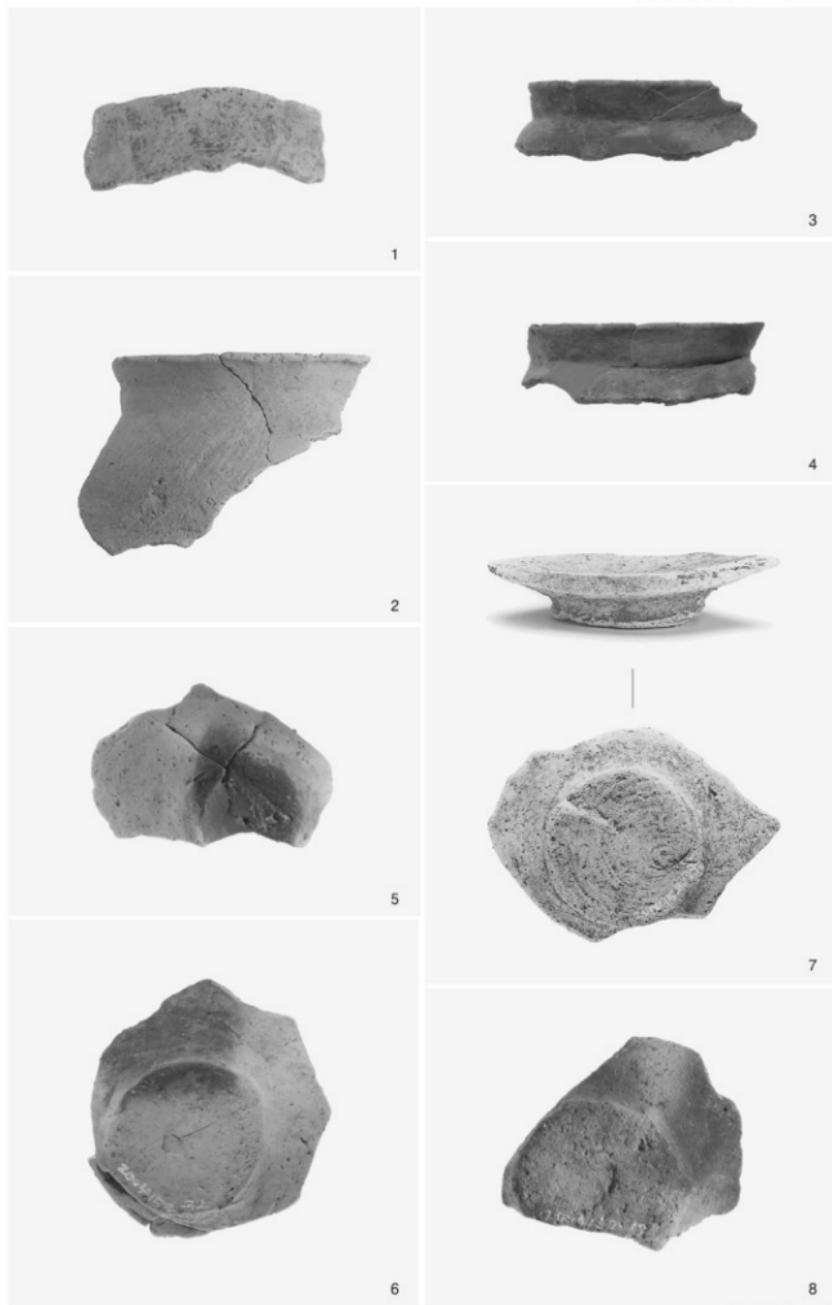
SD01 北から



SD01断面 東から



SK03断面 西から



出土土器 (1 ~ 8)

写真図版5 遺物



10



12

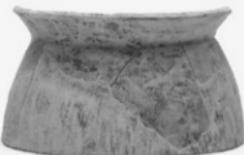
9



13



11



14

写真図版6 遺物



15



20



16



21



17



22



18



23



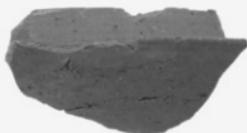
19

出土土器（15～23）

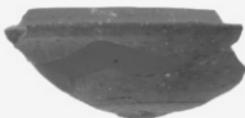
写真図版 7 遺物



24



25



26



|



28



29



27



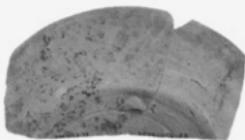
30

出土土器 (24 ~ 30)



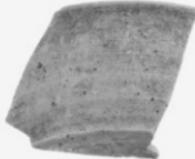
35

31



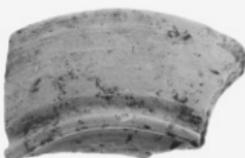
36

32



37

33



38

34

写真図版9 遺物



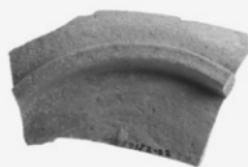
39



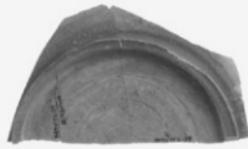
43



40



44



41



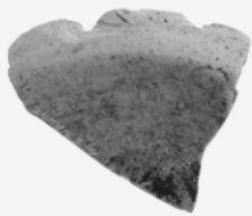
45



42



46



47



51



48



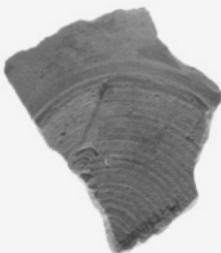
52



49



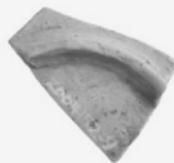
50



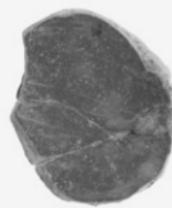
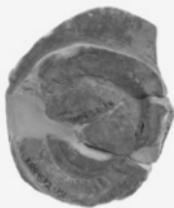
53

出土土器 (47 ~ 53)

写真図版11 遺物



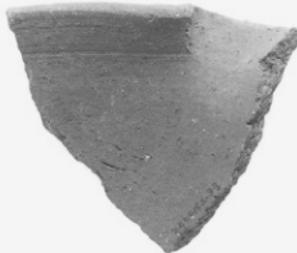
54



55



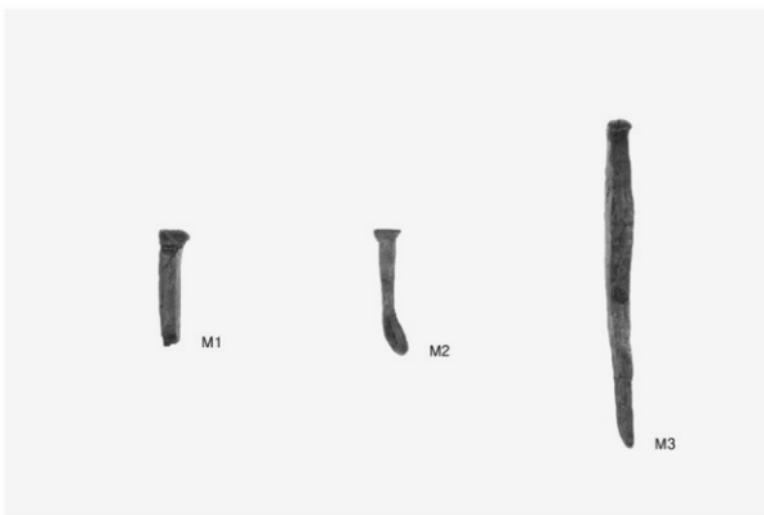
57



56

58

写真図版12 遺物



出土土器鉄製品

兵庫県文化財調査報告 第424冊

三田市

大　藪　遺　跡

(主)三田後川上線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月29日 発行

編　集　　兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発　行　　兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印　刷　　株式会社吉本宝文堂
〒675-1343 小野市来住町883-2
